

# 第15回 教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生 【ライブ版】

2022(令和4)年4月28日

会場 円徳寺

## 講題 : 「『教行信証』 善導大師六字釈と親鸞の名号解釈」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは初めに「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の

ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

## 講義 1

どうもこんにちは、今日は大変天気がいい日で色々用事があったと思いますけれども、ようこそおでかけくださいまして大変ありがとうございます。私は毎日バタバタしておりまして、安居を務めたために、その後全国をまわっておりまして、コロナの最中も安居の講義をさせていただいてまして、コロナに罹らないでよく頑張っていると思いますけれども、今日も頑張ってお話をしたいと思います。

最初から私事で大変恐縮ですが、家内が入院をしております、白血病と言うので最初はびっくりしまして、これでお別れかなと思っておりましたが、ほぼ一年たちまして、先生方が大変よくしてくださいまして、明日退院になりました。いらんことを言わないでいいのに、やっぱり自分で持ち切れんものですから、皆さんに言った手前、退院になりまして大変嬉しく思っています。花でも買って迎えに行行って来たいと思います。

家内は在家の出で、寺ではないのですが、ただ富山のやっぱり土徳の深いところで生まれた。おじいさんとおばあさんがそれこそ妙好人で、それで在家けれども大谷大学に来たような人でしたから、私は一緒に生活をしていれば何か感じてくれると思って、家内に仏教の話はしたことはないのです。それからどこかに話を聞きに行こうとか、この本を読めとか言ったことはないのですが、本人も今回一年間病気で勉強したのでしょうね。いろんなことを訊かれました。

「なんで私だけこんな病気になるんやろう」。誰でもそう思いますよね。「仏教ではそれをどう

言うの?」。「それはな、他因無因と言うんだ」。「自分が病気になったのだから、他(ほか)のところに因があるわけではない。けれども何でなったかわからないから、はっきりと因があると言いくいから、因が無いわけでもない。他のところに因があるわけでもない。しかし自分が病気になっているのだから因が無いわけでもない」と言うと、「うーん、ほんなら自業自得ということ?」と言うから、「そう、自業自得と言うことがわかったら、それが救いだから、だから自業自得と言うことがわからないから何で私が病気になったのかと言っているのだから、それは他のところに因があるわけではないけど、まあ因が無いわけでもなかろうと、こういうふうと言うんだ」。まあ、そんなような話ですよ。

「ほんなら自業自得とわかったらどうなるの?」と。「それはお前が知っているように、松原先生はお亡くなりになる時には「ガンはいただいたものであります」と。こう言って堂々とした。「私は病気と言う病気は全部しました」と。ほんとはよく病気をなされた先生でした。「病気のおかげで聞法させてもろうた。けど、病気はどこに原因があるわけでもない。全部私の責任であります」と、こういうふうにおっしゃっていたじゃない」と言うと、家内も先生をよく知っていますから「うん、そうやったね、何であんなになるんやろう」、「それは親鸞聖人の教え、お釈迦様の教えを「そうだ」とはっきり頭を下げてうなずいたからではないか」と言ったら、「うん、私はそうは思えんけど、でもそう思うたら、多分ものすごく楽やろうね。私もそうなりたいわ」と言っていましたから、色々と本人もそれなりに勉強してきたのだと思っています。まあ、小さいばあさんになりました。まあまあ最初からこんなことを申し上げて大変恐縮です。

皆さんとは今、「行の巻」の七祖のところを勉強しています。少し長く時間をとってしましまして大変申しわけありません。大事だと思うものですから、少し時間をかけて、かけ過ぎました。申しあげましたように龍樹・天親・曇鸞、ここから浄土教が発せられましたね。『大経』から発せられて展開していった。特に中国になりましてからは、『観無量寿経』と言う経典が中国を席卷したのですね。

『観経』と言うのは『観無量寿経』ですから、「無量寿仏を観察する」。こういう経典です。ですからこれは「一経両宗」と言われるのですが、変わった経典で、一つの経典なのだけでも二つの宗がある。説いている内容は二つあるのだと言われます。一つは「観仏三昧」、これは仏を観る、修行をして座禅を組んで仏を観る。こういう方法です。もう一つは「念仏三昧」、この念仏三昧と言う言葉も幅が広い言葉で、称名念仏から念仏を称えながら仏を観ると言う修行の念仏もあります。ですから、そういう幅の広い言葉なのです、この念仏三昧というのは。

念仏を称えても、みなさんご存知のように下品下生のところでは南無阿弥陀仏と臨終に念仏を称えますね。そうすると仏様が来迎としてやって来ると説かれていますよね。そうするとそれは、ある意味で言えばやはり来迎として仏を観ると言うことも含まれているために、称名念仏から仏を観る、念仏によって仏を観ると言う幅広い意味があるわけですね。いずれにしてもこれは、観仏三昧の方は聖道門の人達の目ざす修行ですし、念仏三昧は浄土門の人達が目指す行であるわけですね。

ですから中国では、この『観無量寿経』が圧倒的に広まっていった、末法と言う時代と機が、「末法の機」、「凡夫」と言う自覚が広まっていくと、この『観経』が圧倒的に広まっていったということがあります。ですから皆さんご存知のように、『観経疏』(かんぎょうしよ)という『観経』の註釈書は、観仏三昧で言えば天台智顛(ちぎ)、嘉祥師吉蔵(かじょうじきちぞう)、慧遠(え

おん)、こういう人達がちゃんと『観経疏』を書いています。念仏三昧で言えば善導大師が『観経疏』(『観経四帖疏』)を書いているわけです。そのように中国の仏教を席卷したと言ってもいいわけです。

その中でこの間お話をしましたように、道綽と言う人が出て、末法の凡夫にとっては、もし本当の意味で救われる仏教があるとすると聖道門では絶対に救われないと。もし通入すべき道があるとすれば浄土の一門である。というふうに道綽禅師が浄土教を独立させた。思想的に聖道門から浄土門を独立させて、聖道門と浄土門とは違うのだということをはっきり宣言した。それが道綽禅師のお仕事でした。

ところがこの間申し上げたように道綽禅師の親鸞聖人のご引用の仕方を見ると、東聖典171ページのところから『安楽集』の引文が始まります。この親鸞聖人のご引用の仕方を見ますと、道綽のところの「行」ですね。行は172ページあたりを見ていただくとよくわかりますが、すべて「念仏三昧」で統一されているのです。172ページの最初から三行目、

「菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」ですね。それからその三行後、「もし人ただよく菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」、その二行後、「もしよく菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」、その一行後、「何がゆえぞとならば、よくこの念仏三昧を念ずるは、すなわちこれ一切三昧の中の王なるがゆえなり」、その四行後、終わりから二行目ですが、「常に念仏三昧を修すれば」(西161～、島12-20)、こんなふうに道綽禅師のところの引文は、行がすべて「念仏三昧」で統一されているわけですね。

『安楽集』を読むとこの「念仏三昧」という言葉が繰り返されますが、しかしよく見ると例えば、「称名」、「名を称える」、こういう言葉がいくつも出てくるのです。にもかかわらず親鸞聖人が「念仏三昧」と言う言葉で統一しているということは、そういう方法で私たちに何事かを伝えようとしていると考えられます

ご存知のように、私たちは先ほど勤行しましたが、南無阿弥陀仏、念仏三昧と言うと、これは先ほど申しましたように、「三昧」、三昧と言うのは定(じょう)です。サマーディ(samādhi)と言う定ですから、どうしても聖道門の座禅を組んで心を静かにして仏を観るという印象が強いわけです。けれども、「観念三昧」、「念念三昧」とありますから、ここはやはり仏を観るということも含めて「称名念仏」と言うことを言おうとしているのですけども、それにしても道綽禅師のところは「念念三昧」で全部統一されている。親鸞聖人はそれによって、つまり、まだ行としては聖道門からはっきり決別していないと。聖道門のまあ、香りが残っていると。そういう意味では、浄土教の教学としては道綽のところまで完結していないと。こういうことを親鸞聖人がこういう引用の仕方であらうとしているのだと思われま。

なぜかと言いますと、その次、今日皆さんとお読みする善導大師のところになりますと、この行が東聖典173ページ『往生礼讃』、「光明寺の和尚の云わく、また『文殊般若』に云うがごとし。」とあって、「一行三昧を明かさんと欲う」。これ經典の言葉ですけども、「一行三昧」と言うのは「念念一つを称える」ということなのですが、「ただ勤めて、独り空閑に処してもろもろの乱意を捨て、心を一仏に係けて、相貌を観ぜず」。わかりますね。独り座って座禅を組んで、そして空の覚りを観る。乱れた心を捨てて、「心を一仏に係けて」、一つの仏様ばかりを思って、その仏様を観るということではなくて、「専ら名字を称すれば」というふうに、最初から「称名念仏」。観念ではない、仏を観るのではないのだと、「専ら名字を称すれば」と、こう出て来ます。

そして、「すなわち念の中において、かの阿弥陀仏および一切仏等を見たてまつるを得」といへり」と。つまり、称名念仏によって阿弥陀仏と一切の仏を見ることができるとのこと。つまり、聖道門で仏を觀たいと座禪を組んでるけど、座禪じゃなくて実は称名念仏なのよと。このように称名念仏の方に重きが移って行きます。

そして「問うて曰わく、何がゆえぞ觀を作さしめずして、直ちに専ら名字を称せしむるは、何の意かあるや」。これは称名念仏ですね。ただ、どうして仏を觀るということをさせないで、「専ら名字を称えなさい」というのはどんな意味があるのかと、こう問うて、「答えて曰わく、いまし衆生障重くして、境は細なり」。今の衆生は煩惱の障りが重くて、そして私たちが生きている世界は、煩惱の、先ほどご住職が言っていたように戦争があり、殺し合いがあり、事故があり、人間のすることはどこまで行っても止めどがなく煩惱に汚されていくのである。

しかも自分はどうかと言うと、「心は龜(そ)なり」、いつも心は虚ろで、「識颺(あが)り」、意識はいつも跳ね上がって、事実と違うことばかり妄想する。そして「神(しん)飛びて」、精神は少しも落ち着きがなく(註：神とは精神のこと)、いつも飛んで回っている。そんな人間に、一ところに心をかけて仏様を觀なさいなんて言うことは、そんなものは「觀成就しがたきに由つてなり」。要するにそんなことは無理だと。だから凡夫にとっては称名念仏一つしかないのだと言うことからここは始まります。

ここでわかりいただけるように、善導大師は凡夫と言う立場に立って、そして私たちの生活を見ていたらわかりますね。皆さんはどうか知りませんが、私は夜があんまり寝られないんです。と言うか、あっちこっちでお話をしていたら興奮するでしょう。寝ようと思っても寝られないし、昨日も、今日またここに来なあかんと思っただけで寝られないし(笑)、寝ようと思っただけで11時ごろ布団に入ったのですが、寝られないし、どうしたものかと下に行ったらフウタ(猫)が寝てますので、「あいつを起こすとかわいそうかな」(笑)と思いながら、下にごそごそ降りて行ってビールを2本ほど飲み(笑)、これではもうちょっと寝られんと思って焼酎を飲んで(笑)、今日はまた胃が悪い。そんなことばかりして、酒飲んでまた寝られないし、これはもうどうしたものかと思って、田畑先生に怒られますけども睡眠薬を半分飲んで、まあ寝たか寝らんかわからんぐらいで起きて、今度はボーとしとるでしょう。家内はいないし朝飯は作らんならんし、バタバタバタバタしてご飯作って、また明日家内が帰って来ると言うんやったら、きれいにしておかなあかんと思って、一生懸命掃除して、風呂からトイレから拭いて回って(笑)、まあそれはバタバタバタバタ、わかるでしょう、そしてちっとも聖典を開く暇もなくここに来て、まあイライライライラして、なんとなく落ち着かん。まあ日々の生活ってそんなものですね。皆さん方も事情はちがってもね。

何かバタバタして時間は過ぎるんですけど、その全体が何かこう、何をしているのだろうと思うし、それから何かこう、よくわからないけれども何かイライラする。そして先があんまり見えんし、年いくと。何んか知らんけどこの辺が痛いですわ。これはどうなるのかなと思って、そんなことを思ってみたりしながら、まあ、毎日毎日そんなことを繰り返していくわけです。

けれどもよく考えると、そういう日々の生活に追われて、何かこう満ち足りなきみたいなものを感じるのは、やはり日々の毎日の出来事が、どういったらいいか、私を問うているというか、お前はどこに行く気やと。もう年がたって先がないけど、お前はそもそもどこに行く気やと。お前はこの世に何しに来たのだと。何かそういう根源的な日々の生活の不安、虚しさ、孤独、そう

いうものが実は、よく考えると、私たちの一番の深い根源的な問題を促しているのだと。そう思うわけです。皆さんもおわかりいただけますね。

何かこれでよしと、人生これでOKだと言える、そういうものに何か遇いたい。それが逆に毎日の仕事に追われて疲れたなあと。そういう感じは、これはやはり今言った「お前の出世本懐とは何ぞや」、「命を懸けて死んでいけるものは何か」、「何を求めて生きようとしているか」。少しまあ硬く言えば、そういうことを日々の生活に追われながら問われているのだと思うのですね。

そういう自分の人生の中で、初めて善導大師がこの前言いましてように「南無阿弥陀仏一つでいいのだ」と。「称名念仏」。「名を称えていく」。こんなことは仏道の常識からするとありえない。

「南無阿弥陀仏」と称えて、どうして今言ったような私たちの根源的な問題が解けるのかね。「そんな馬鹿なことがあるか」と言うのが常識なわけです。

ところがそういう中で善導大師は、南無阿弥陀仏の中に、まあはっきり言えば、「私は称名念仏によって自分の人生を勝ち取ったのだ」と。「これで十分に生きて十分に死ねる者になったのだ」と。「称名念仏以外にはあり得ない」と。こういう高らかに宣言をしたわけです。そこに善導大師の「六字釈」と言う素晴らしい、浄土教の歴史から言えば目を見張るようなお仕事をなさった。それが善導大師のお仕事なのですね。

ですから親鸞聖人は道綽禪師のところまでは、まだ行として聖道門から決別したというふうには言えないと。やはり広い意味があるから「念仏三昧」というのは。けど善導大師のところに来て、今度は全部「称名念仏」と言うことで統一されていきます。そのへんに親鸞聖人の単に、適当に文章を引用しているのではない、こういう引用の仕方をしながら、私たちにどういうことを告げようとしている。それが今申し上げたように道綽のところでは完成されていなかったけれども、善導大師のところで行が確立した。

聖道門と浄土門との違いを明確にする方法は、「教」、「行」、「証」においてその違いを明確にしなければならぬ。そうですね。ですから少し勉強なされた方はわかるように、『選択集』には、最初は、私たちがよりどころにする経典は浄土の三部経と天親菩薩の『浄土論』一論であると宣言している。これで、「教」が「浄土三部経」、それから「一論」。『選択集』で法然が主張するところです。聖道門の方は浄土の三部経以外の経典と考えたらいいです。『華嚴経』があり『涅槃経』があり『般若経』があり『法華経』がある。そういうすべての大乘経典によって聖道門は成り立っていますから、大乘の諸経典。

「行」は「称名念仏」。聖道門の方は「六波羅蜜の行」、修行。禅定を得る。「戒・定・慧」（「戒」は善を修め悪を防ぐこと。「定」は心身の乱れを静めること。「慧」は真理を証得すること。）の定ですね。

「証」は「念仏往生」。大乘仏教の方は空の覚りを悟って、その覚りに立って自利利他を成就していく菩薩道である。それに対して浄土教は、阿弥陀の世界を本国と教えられて、自分の本国に帰って行こうとする。それは人間の欲を超えて仏様の世界に帰りたい。もう少し言えば、比べるということを超えて、私が私になっていく道である。そう言ってもいい。そういう念仏往生。

この「教・行・証」において違いを明確にしなければはつきり独立したことになる。ということですね。ですから親鸞聖人も「教・行・証文類」として、『教行信証』もその違いを明確にしようとしているわけです。その際一番大切なのが、やはり行です。これが一番わかりやすい。六波羅蜜の行、修行をするのか、あるいは称名念仏なのか。その称名念仏と言うことを善導

大師は確立して、そして『観経』によって浄土の教学を完成させた。こう言っていいわけですね。こういうことを先ほど申しましたように、親鸞聖人は引用の仕方で私たちに告げようとしている。このように考えられます。

それで今日は善導大師の文章をずっと読んでいるとまた時間をとってしまうから、「六字釈」を中心にお話をさせていただきますが、この善導大師のところの引文は全部で十文あります。最初を見てください。東聖典173ページ、科文(かもん)番号・39、『往生礼讃』。わかりますね。その次のページ39の次は40ですから、174ページの終わりから三行目に、「また云わく、ただ念仏の衆生を觀そなわして、攝取して捨てざるがゆえに、阿弥陀と名づく、と」。短いですがこれも引用文です。これは『往生礼讃』からの引用文です。次の41、これも『往生礼讃』からの引用です。42、次のページになります。175ページこれも『往生礼讃』からの引用になります。43、「また云わく、問うて曰わく、阿弥陀仏を称念し礼観して」、これも『往生礼讃』からの引用になります。このように『往生礼讃』からは五文引用しています。いいですね。

そして、その『往生礼讃』からの引用が終わりますと、176ページの終わりから4行目、「玄義分」。これは『観経疏』です。『観経疏』から44と言う文章とその次の45と言う文章、これは「六字釈」ですから、また後で問題にしますけれども、『観経疏』からはこの二文が引用されています。その次、177ページの46、47、この二文は『観念法門』から引用されます。最後の48という文章、これは『般舟讃』(はんじゅさん)からの引用になります。こう見てきますと『往生礼讃』から五文、『観経疏』から二文、それから『観念法門』から二文、最後の『般舟讃』から一文と、こうなりますね。(西163~169、島12-21~12-25)

善導大師というと『観経』の註釈書の『観経疏』が主著ですから、一番大事な書物ですね。ですから昔から善導大師と言うとすぐに『観経疏』を勉強して、「『観経疏』、『観経疏』」と今まで言ってきたわけですね。しかしよく見てごらんください、『観経疏』二文、『往生礼讃』五文、親鸞聖人の『教行信証』の全体の引き方を見ても、善導大師から引用するときには、この『往生礼讃』が中心になっているということを知っておいてください。なぜかということ、善導大師は確かに『観経』の教学を完成させた方です。けれども私が前から申し上げるように、救いは阿弥陀の本願にしかありませんから、善導大師も『大経』の阿弥陀の本願に立って『観経』を註釈しているわけですね。

この『往生礼讃』は、もともとの『往生礼讃』を開くとわかります。龍樹・天親・『大経』によって仏道の神髄を明らかにしていくというのが善導大師の著作の『往生礼讃』の一番最初の「序文」にそう書かれています。『観経』によって、『観経』の教学を大成させたのですが、その『観経』の教学を大成させた善導大師は、自分が立っていた『大経』、それを明らかにしているのが『往生礼讃』ですから、親鸞聖人の『教行信証』を見ると、この『往生礼讃』が相当数大事なところに引用されていて、『観経疏』の方はそんなにたくさんはありません。そのこともよく知っておいてください。そうでないと、それはそうです、親鸞聖人は『大経』によって、この浄土真宗の教えを聖道門と対決させている、そういう方ですから、善導大師といえども『往生礼讃』に依っているということがよくわかると思います。

ところで、『観経』に依って浄土教の学問を大成させていくときの立脚点は、それは何と言っても称名念仏ですから、その称名念仏について176ページの一番最後のところ、「南無」と言

うは、すなわちこれ帰命なり」。南無と言うのは、これはもともとインドの言葉ですから、「ナムアマターバー」というインドの言葉の音を取って「南無」と漢字を当ててるわけですから、ですからこの「南無」というのは、「帰命」であると。一つは「帰命」。もう一つは、「またこれ発願回向の義なり」。善導大師は六字の名号の「南無」に、「帰命」と「発願回向」と、この二つの意味があると、こういうふうにはまず仰られるわけです。

難しいですね。しかし今までお話してきたように、南無阿弥陀仏の教えに会うというのは、人間が逆立ちしてもわからないことを仏様の教えに見抜かれたと。私たちは人間に生まれてからしか、自分になってからしか、人間のことは考えられません。だから私たちの目は自分を前提にして必ず外を向いていますから、いつも申し上げるように、地獄のような苦しい思いをした時には、必ず人のことを文句を言う。そして自分のことは問えないようになっている。目が外に向いているからね。自分の目は自分の目を見れないのと同じように、人間は自分が立っている自我というものについては、もう問えない。

ところが本願の教えは、いつも申しますように、その自我という相対分別と言ってもいいし、あるいは、相対分別と言うのは二つに分けて考えることね。病気になったという、治ったらいいし、治らなかつたらいやだと、こういうふうにはしか考えられない。これは松原先生がよく仰っていました。「病気というのは、そもそも無記だ」と。無記と言うのは、いいとか悪いとか意味はないのだと。病気と言う事実なのだ。それを人間は「なつたからいやだ」とか、「治つたからいい」とかというふうにしてしまう。そしてつまらんことを苦しんでいく。もともと病気というのはもともとあったものが出て来ただけで、これは無記なのだ。無記と言うのは今言ったように、人間の分別に汚れていない。もともと病気は病気なのです。

(註:無記、仏教では、倫理的価値を(1)善、(2)悪、(3)無記の3つに分けるが、このうち「無記」は、「善とも悪とも記別することができないもの」をいう)

それを人間はすぐに「いい」とか「悪い」とか判断して、そして苦しんでいく。だからそういう相対分別と言ってもいいし、二つ並べて考えると、必ず「いいか、悪いか」になる。比較、比べるということになる。比べるということになると、必ず「いいか、悪いか」、「勝つたか、負けたか」になる。そうふうに人間の自我、私たちの言葉で言うと「自我」だけでも、親鸞聖人の言葉で言えば「自力」と言うところに地獄のもとがあるのだと。これを教えられる。だから人間が思ってもみないこと、逆立ちしてもわからんことを仏様が最初から見抜いてくださっている。本願の教えはそうになっている。

何度も申し上げましたね、「地獄・餓鬼・畜生がないように」と誓っている。それは「自殺するな、戦争するな」と言っているのです。「私の国にそういうことがあったら自分は仏にならない」と誓っている。それは、そっち側はそれをやっているから、だからあなたたち一人ひとりの中に人と比べて勝ちたいという根性が、喧嘩する。自分が殺されそうになったら必ず人でも殺す。そういう根性がだれの中にも潜んでいる。そういうことは、いやそんなことはないと普通僕らは思いたいです。ウクライナの戦争のテレビ見ながら、やりきれんなど思いながら、自分で私もちよっと捨てたものじゃないなど。こういうことを「やりきれない」と思ってる心があるんだから、まあ捨てたものじゃないと思うけど、そんな心はいつでも変わる。正義のために人でも殺す。こういうふうになっていく。

前にも申し上げたことがありますけど、「今に国連が戦争するぞ」と。そういう自我と言うも

のを前提にしてものを見る見方、これは「外道」と言う見方ですが、そういうものの見方の中では、もう戦争も自殺も解けない。だから仏様は「人間が人間を超えよ」と。貪・瞋・痴の煩惱、特に自分に執着する自己執着、それをも超えて仏になっていけと。相対分別と言う、比べると言うことを全部超えていきなさいと。そこにしか戦争を超える道はもうないのだと言って、人間を前提にして外を見るのを「外道」と言うけど、お釈迦様の覚りは中を見ている。「内観道」という。それは内観道と言うのは私たちにはできない。聖道門はそれを自分でしようとしているわけです。それが聖道門ですね。だけどやることが自力だからね。だからどうしてもできない。それを見事に果たしてくださっているのが「本願の教え」です。本願の教えだけが人間を見抜いている。本願の教えだけが地獄のもとを見抜いている。本願の世界を見れない人間に、本願は言葉として本願の世界を教えられる。だから本願の教えだけが内観道を実現してるんだと。

その本願の教えに依ってはじめて「帰命」と。仏様の教えは偉いと。自分が逆立ちしてもわからんことを先に見抜いてくださった。初めて「帰命」と頭が下がるのだと言うのが善導大師の「帰命」と言う註釈なのです。

そしてその時に初めて、身の分別を生きるということがどれほど愚かなことか、身の分別を超えて一如の世界・仏様の世界こそが本国である。だから、できるかできないかはわからないけれど、生きている間、命をかけて仏様の世界に帰りたいという、そういう願いを起こすのが「発願回向」ですね。仏様の世界に帰りたいという願いを起こす。これが発願です。そして回向と言うのは、自分の人生のすべてを浄土の往生に向けていく。初めて自分の人生の方向が決まったのだと。私の人生はこれまで、どこに行くかわからない、けど初めて仏様の世界に帰って行くと、はっきりしたと。仏様の世界に人生をあげて帰って行きたいのだと。こういう帰命と発願回向と言うことが南無のところにあるのだ。こういう註釈を善導大師はしてくださっています。素晴らしいですね。

そしてね、この帰命と発願回向、これは、私たち衆生の根源的な願い。それが満たされていく道である。わかりますね。生きるということも死ぬということも、比べないで引き受けていける。自分のいいところ悪いところを分けなくて、丸ごと私だと言える者になる。そこに人間として生まれてきてよかった、私が私でよかったんだと、そういう者になっていく、そういう道に自分は今立ったのだと言って、善導大師は衆生の根源的な願い、これが帰命と発願回向のところまで満たされていくのだと。なぜなら、この阿弥陀仏という仏様は、この願いをどちらも満たしてくださるはたらきを持っているからだ。だから、南無には衆生の根源的な願いである帰命と発願回向が託されている。阿弥陀仏の方には、その願いを満たしてくださる阿弥陀の行、一切の人を救いたいと思って誓ったのが四十八の本願ですね。その本願は具体的には阿弥陀仏一つになっていった。

だから阿弥陀仏と言う仏は、たとえば「尽十方無碍光如来」、『大経』の伝統で言えば尽十方無碍光如来。今日の阿弥陀如来の智慧、それは人間の愚かさを全部見抜いて、そしてそのまま仏様の世界に包んでくださる。発願回向と言うと、今まで行ったことのないところにこれから行くというのじゃなくて、南無阿弥陀仏と頭を下げた時に、阿弥陀さんの世界にもう包まれているから、そのまま実は救いなのだということを仏様の方が実現してくださるから、こっちは（仏様）は行なのだ。「即是其行」と。こういうふうに六字釈は善導大師が註釈をしてくださりました。

この南無阿弥陀仏一つのところに私たちの救いが凝集的に語られている。あるいは南無阿弥

陀仏一つのところに私たちの救い、私たちの出世本懐、それが自覚的に語られている。そういう南無阿弥陀仏の註釈、それを「六字釈」と言います。ですから「六字釈」と言う場合には、これは善導大師の南無阿弥陀仏の註釈だというふうに覚えておいてください、いいですね。

先ほど申し上げましたように、善導大師は偉い人なのです。大事な言葉を言うておきましょうか。東聖典 284 ページを開けていただけますか。ここは「教」「行」「信」「証」と往相の回向のところの一番最後の言葉を善導大師の言葉で親鸞聖人はまとめています。だから、これは大事なのです。284 ページですよ。最初から二行目ね。

「**帰去来**（いざいなん）、**魔郷には停**（とど）まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流転して、**尽**（ことごと）くみな徑たり。いたるところに余の樂なし、ただ愁歎の声を聞く。この生平（しょうひょう）を畢えて後、かの涅槃の城（みやこ）に入らん」（西 312、島 12-121）。

この言葉ですね。親鸞聖人は「教」「行」「信」「証」を終える時の一番最後の、往相回向の最後の文章にこの言葉を持ってきます。意味はわかりますね。今言ったように、仏様の教えに触れて、初めて仏様の世界、比べないでいい世界が私たちの本国だと教えられた。だから、今すぐみんなで帰ろうではないか。こんな「魔郷にはとどまるべからず」。煩惱にまみれて殺し合いをするようなところにとどまてはいけないと。曠劫よりこの方、六道に流転して、永遠の昔から人間は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天という、そういう六つの道にいつまでたっても流転して、「ことごとくみなへたり」と。地獄であろうが天であろうが、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」てわかりますね。これは私たちの意識が作っていく世界じゃないですかね。有頂天になることもあるでしょう、時々、ねえ。そしてボトッとこけるでしょう、有頂天になったら（笑）。その時は調子に乗ってるけど、後でしまったと思うことも多いでしょう（笑）。どっちにしても地獄になっていく。だから地獄から有頂天に至るまで、みんな私はこれまで経めぐってきたと。しかしどこに行っても本当の意味の楽しみなんか何一つない。ただお互いに愁い歎く声を聞くしかない。だからこの命が終えた、この煩惱の身が終えた時に、涅槃の覺りを、身も心もどっちも涅槃の覺りをいただく者になりたい。これが発願回向と言うときの善導大師の言葉です。よくわかるでしょう。

この言葉は何度も引用されるのですよ。東聖典 321 ページ、真ん中へんに「定善義」とあるでしょう。九行目、ここにも同じ文章があります。「**帰去来、魔郷には停まるべからず**」。これは「真仏土の巻」です。象徴的でしょう。「証の巻」の最後にさっきの善導大師の文章が引かれる。そして「真仏土の巻」と言うのは、これは仏様の覺りそのものを表すところに、やはりこの言葉、

「**帰去来、魔郷には停まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流転して、ことごとくみな徑たり。到る処に余の樂なし、ただ愁歎の声を聞く。この生平を畢えて後、かの涅槃の城に入らん、と**」（西 369、島 12-156）。

この煩惱の身が終わって、そうすると心も体も丸ごと涅槃の世界に帰って行くのだと。曾我（量深）先生はね、心は、さっき言ったように仏様の教えに遇って南無阿弥陀仏と頭が下がった時に、その時に、もう心は阿弥陀仏の世界に包まれている。心はね。ところが身が煩惱だから、これは死ぬまで抜けない。だから曾我さんは、「この時には本当は、心は仏様の世界に包まれたという感動があるのです。だけど身が煩惱の身だから、これは命を終わらないと涅槃を覺ったとは言えない」と。こういうふうに仰っているわけです。よくわかりますね。

だから善導大師も、身が煩惱だから、命終わって涅槃に必ず帰って行くのだと。涅槃に必ず帰

って行くという自信はどこにあるの？ 「今、涅槃に包まれているから」です。そうですね。そうでなければ自信になりません。そうでしょう。「正定聚、正定聚」とよく言いますがね、正定聚の自信ってどこにあるの？ それは「今、仏様の涅槃の世界に包まれた」と、それがあから正定聚と言う自信になるわけですよ。そうでしょう。

私の先生が亡くなる時に、友達に西元宗助（元京都府立大学教授）と言う先生がいらっしやったのです。西元宗助先生が松原先生より先に亡くなってしまった。松原先生が亡くなる二週間くらい前でしたかね、お亡くなりになったのですよ。そしたら松原先生はもう筆を執って書けませんから、奥さんに電報を打ってくれと、こう言って「私の方が先に浄土に往くと思っていたけれども、君の方が先に浄土に帰ったね。浄土で待っていてください。私も必ず参りますから」と。そう言う電報でした。いいでしょう。わかりますね。「**臨終一念の夕**（ゆうべ）、**大般涅槃を超証す**」（「信の巻」東250頁、西264、島12-92）。これが親鸞聖人の仏教の一番大事なところだからね」と言って、私が先生に教えられました。

命終われば必ず仏様の世界に帰って行く。その信心を「今頂いている」ということが大事です。わかりますね、今、涅槃に包まれたという感動があるから、必ず涅槃に往く者に決まったのだと。それがなかったら夢みtain話に変わってしまう。だからこの時に、「南無阿弥陀仏」と頭を下げた時に、仏様の教え、仏様の智慧、それに触れて、仏様の世界が初めて一如の世界に解放されていった。阿難がお釈迦様に遇って「世を超えた！」と叫んだでしょう。あれです。あれが心には涅槃という世界をいただいたけども、身が凡夫だから、一生かけて仏様の涅槃の世界に帰って行く者になりましょうと。これが善導大師の教えですね。その通り書いてあるでしょう。「魔郷にはとどまてはいけない」と。この身が終わる時に必ず大般涅槃、涅槃の覚りを完全に頂いて仏になるということです。成仏するということです。

この言葉はまだあるのですよ。ですから、これはある意味の善導大師の一番大切な言葉と言ってもいいかもしれません。もう一つは、これは『法事讃』の言葉なのですが、同じ意味です。東聖典355ページです。98と言う文章があるでしょう。これは「化身土の巻」ですけれども、ここに『法事讃』の「また云わく」とあって、同じ意味ですね。

「**帰去来、他郷には停まるべからず。仏に従いて、本家に帰せよ。本国に還りぬれば、一切の行願自然に成ず。悲喜交わり流る。**」（西411、島12-186）

いいですね。わかりますね。みんな一緒に帰ろうではないかと。こんな本国ではない他郷にとどまてはいけないと。仏様の教えに従って本家に帰ろうではないか、本国に還れば、私たちの一切の行願、私たちの根源的な、さっき言った出世本懐、私たちはどこに向かい、何を求めて生きているのか、そういう私たちの一切の行願が自然に完成するのだと。

「悲喜交わり流る」。ここから「**悲喜の涙を抑えて**」（「化身土の巻」後序、東400頁、西473、島12-224）と言う言葉が出て来るのです。わかりますね。本当の教えに遇ったときには、理解するのじゃないと申し上げました。人間としての悲しみ、そしてその全体を救ってくださった仏様の大きな喜び、この「悲喜」、これが、教えが身に突き刺さった時のわかり方だと前に申し上げましたね。善導大師はそう言っているのです。

「**悲喜交わり流る。深く自ら度**（はか）**るに、釈迦仏の開悟に因**（よ）**らずは、弥陀の名願いずれの時にか聞かん。仏の慈恩を荷**（にな）**いても、実**（まこと）**に報じ難し、と。**」

これは、今言ったように人間としての悲しみを超えた、比べることを超えた仏様の大きな、世

を超えた世界に私たちは解放させられたと。よく考えるとお釈迦様の覚りを悟った本願の教えに依らなかったならば、弥陀の念仏にどうして遇うことができようか。「仏の慈恩」、釈迦・弥陀二尊の恩を頂いても頂いても自分は凡夫だから、それに百分の一も応えることはできない。それぐらい大きな喜び。さっき申しました、「私は人生に勝ったのだ」と。毎日の生活に追われて、イライラし不安で孤独であるときに、「何をしているのだろうか」「何を求めているのだろうか」と、そういうことの全部が、実は、南無阿弥陀仏と言うところで完全に満たされていくのだと。だからこの六字の名号以外に一切衆生を救うものはないのだと。それは釈迦の発遣と弥陀の招喚によるのだけでも、発遣と招喚と言うと、二人おるように思うけど、本当はお釈迦様が『大経』を説いてくださったということに極まる。お釈迦様が『大経』の教えを説いてくださった。そこに阿弥陀如来のはたらきを頂いたのだから。それでは休憩しましょう。(休憩)

## 講義 2

それではもうしばらくお話をさせていただきます。先ほど申しましたように、この浄土教の歴史の中で初めて、この南無阿弥陀仏という六字の名号を善導大師は、自分の自覚的に立った、初めて流転を超えた、私たちの根本志願である「人間として生まれてよかった」とか、「私は私でよかった」とか、「誰とも比べないで、自殺や戦争を超えて生きたい」。こういう人間の根本的な願いが満たされていくのだと。だから念仏一つで十分なのだと言うことを、この喜びを込めて語っているわけです。

ですから、これはよくこういうお仕事をなさったなあと思いますけれども、今申しましたように、しかしながらその背景には、『観経』ですから、表向きの南無阿弥陀仏の、南無には帰命と発願回向がある。光明名号、名号が智慧の光として私たちのところに届いて、帰命と発願回向がある。こういう素晴らしい解説なのですが、先ほど皆さんと最初に読み始めました『往生礼讃』のところに、東聖典173ページのところをちょっと読み始めましたね。そして「専ら名字を称する」、「一仏を称する」、こういう言葉が出てくるのですが、もうここは、大切ではないということはないのですが、一番大事なところを申し上げますので線を引いてください。東聖典174ページの八行目のところ、いいですか。

「しかるに弥陀世尊、もと深重の誓願を發(おこ)して、光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念せしむれば、」(西165、島12-22)

こういう言葉がありますね。「しかるに弥陀世尊」、阿弥陀如来は、「もと深重の請願を發して」、「もと」、「因の本願」として、深い本願の四十八願をおこして下さって、それを果の名号として、本願が名号になったのですから、だから光明名号をもって十方を摂化したもうと。光明名号をもって十方を摂化する。これが南無阿弥陀仏の相(すがた)です。けれども、その後ろに「もと」、これは「本」と言う字ですよ、因の「もと」。その本願の背景には深重の請願があるのです。そうですね。だから「ただ信心をして求念せしむ」。この言葉はね、これから皆さんと読んでいく「両重因縁の例え」と言うのがあるの知ってる？

若干「うんうん」って言ってますが、そのほかの人は「何のこと？」と(笑)。それ何のこと

と言う顔しとるけど、あのね、親鸞聖人がこの「行の巻」を進めて、そして、終わっていくについて、東聖典190ページ、ここに96と言う文章があるでしょう。これを読んでみます。これは親鸞聖人の御自釈（ごじしゃく）だから、「行の巻」、ずっと七祖が終わって、そしてこの御自釈を付けてるところです。そこに「良（まこと）に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは」、「徳号の慈父」というのは名号のこと、徳号ですから、名号の父がいなければ、「能生の因闕（か）けなん」。生まれさせるという因が欠けてしまうと。そうですね。それから「光明の悲母ましまさずは所生の縁乖（そむ）きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらずは光明土に到ることなし。」（西187、島12-37～）、ここまでちょっと言いましょう。

徳号の慈父、名号の父と光明の母がなければ、子どもは生まれることはない。父と母の因縁が和合して、初めて子どもが生まれてくる。ですから光明・名号で一応いいわけです。一応光明・名号の縁によって子どもが生まれてくる。ここまでで一応いいのですが、その後に「信心の業識にあらずは光明土に到ることなし」と。今度は、生まれる方の子どもの因がはっきりしなければ、信心の業識と言うのは生まれる子どもの方です。子どもの信心がはっきりしなければ、光明土、阿弥陀の世界、一如の世界がわかることはない。

「真実信の業識、これすなわち内因とす」。だから生まれる方の因がなければ、名号と光明は縁だから、それに対して生まれる方の因がなければ生まれて来ない。

「光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。かるがゆえに宗師は」、だから善導大師は「光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念せしむと」（礼讃）と言（のたま）えり」。さっきの文章です。

私が印をつけてくださいと言った文章ですね。そこに善導大師が言うように、「光明名号をもって十方を救い取るのだ」と。しかし「信心をして求念せしむ」と、こうあるでしょうと。それは光明名号は「外縁」であり、信心が「因」だからだと。だから「信心の業識」、これが大切なのだというふうに親鸞聖人が註釈していきます。

ややこしいですか？ あのね、これ（南無阿弥陀仏）は名号ですね。この名号には、さっき言ったように、名号を父とし、この名号には仏様の智慧の光が輝いている。本願の教えとして。だから名号と光明、名号の父と光明の母。まず最初の例えは、この父と母によって子どもが生まれますよ。ここまででしたね。それはそれでいいわけです。

ところが、生まれるためには、これは「外縁」だと。「縁」になると。名号と光明とは外側から子どもを産むための「縁」になる。生まれる方の信心の「因」がいると。だから善導大師も『往生礼讃』で先ほど言っていたように「光明名号の父母を縁とし、そして「信心によって求念せしむ」とこう書いているでしょう」と。だから信心の「因」ということがなければ、外縁だけでは十分でない。申し上げていることわかりますかね。

もうちょっと言うと、僕らは普通、仏教なんかわからないのだから、仏教なんか忘れて生活しているのだから、そういう人間にはわからないような仏教がなぜ突き刺さったのかね。そして、もし本当に南無阿弥陀仏と頭が下がったら、何で自分のような者がこういう仏様の世界に目を開いたのだらうと、不思議でしょうがないと言うことがあるわけです。何でか。それは「因」、光明名号の、『観経』で明らかにしているだけでは十分ではないから、善導大師自身も「信心によって求念せしむ」と。これは「信心に依るのだ」と書いていると。だから我々の信心、因の方ね、光明名号を外側の縁とすると、私たちの因、「因縁が和合する」ということをちゃんととはっ

きりさせなければ、外縁だけではわかりにくい。

あの、先ほどお話していて、どう言ったらいいかなあ、この中にやっぱり、わかった人がいるのよ。ばあちゃんでも、やっぱり人生経験を苦勞して、そして聞法してきたことがこの身に突き刺さってね、「ああそうだ」とそういう体験を持った人がやっぱりこの中に居るのよ。わかるよ、顔を見とったら。そういう難しい話をし出すと、そういう人はキラキラとした目をして、こうして聞くのやけど、そういう話をすると「ふうーん」(笑)と、まあお休みになる方もいらっしやる(笑)。それはやはり体験が無ければわからないということになる。体験が無くてもわかるように完備しなければならない。道理としてね。南無阿弥陀仏の教えに遇った人はこれはよくわかる。けど、遇ってない人は、何のことか、何で帰命が起こるの？と。まずこれがわからない。何で帰命が起こるのかと。明恵がそう言っている、何で帰命が起こるんやと。

これははっきり言うと、浄土門は覺りをいただくという方、聖道門は死ぬまで仏道を歩むという方。聖道門は、凡夫は覺りを悟れない、仏道も歩けないと言っている。だから、この二つの間にちゃんと答えるように、南無阿弥陀仏と頭を下げた時に、世を超えた「超世」という、それが私を包んでくださるのだ。けどもその時は、心はわかっているけども身が凡夫だから、一生仏様の世界に帰って行こうという歩みになっていく。だから凡夫であっても覺りを悟ることができるし、仏道を歩めるのだと、こう言っているのです。これは聖道門の批判に対して善導大師がそう答えているわけです。だから実によくわかるのだけれども、聖道門からすると「何で？」っていう、「何で覺りが悟れるの？ 意味がわからん」と。明恵がそうでしたね。

だからそういう意味で親鸞聖人は、浄土門は光明名号、善導大師が明らかにして下さった光明名号というのは「外縁」として明らかにして下さった。この「因」の方、なぜかという理由をきちっと道理として言わなければ、本当の意味で理屈として完結しないと。仏道の理屈として完結しないから、この「因」の方を明確にするために、親鸞聖人は「善導の名号解釈」をもう一回、「親鸞の名号解釈」と言う形でやり直します。それが大事。そこが七祖の中で一番山になるところ、核になるところです。そこをちょっと見てみましょう。

この「六字釈」が終わりますと、善導大師の『般舟讚』の引文が終わりますと、いきなり説明が無く親鸞聖人の御自釈が始まるでしょ。そこを一回読んでみますよ。東聖典177ページの49というところ。まあ皆さん勉強に慣れないから、それだけでちょっと嫌かなあ。けどしょうがないでしょう、『教行信証』を勉強しようということですから(笑)。

読みますよ。善導大師は「しかれば、「南無」の言は帰命なり」(西170、島12-25)。これは親鸞聖人の言葉ですよ。このように善導大師が言ったように、「南無」と言う言葉には「帰命」と言う意味があると善導大師は言ったと。「帰」の言は、「帰命」を「帰」と「命」の二つに分けます。そして、「帰」の言は、至なり、また帰説(きえつ)なり。説の字、悦の音(こえ)、また帰説(きさい)なり、説の字は、税(さい)の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述(のぶ)なり、人の意(こころ)を宣述(のぶ)るなり」。

ここまでが「帰」です。これは「字訓釈」(じくんしゃく)と言うのですから、親鸞聖人はこの「帰」と言う字を、七祖の聖教とか、当時の大辞典とか、そういうものを引いて、ここに「帰」の言葉の意味を、こういう意味がこういうふうに説かれてるよということを、言葉一つひとつに註釈を付けているわけです。

ですから私たちからすると、これはよくわからない。けども、ともかくこの「帰」の方には、

帰、税、「説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり」。ここから帰は、「述なり、人の意を宣述るなり。」とありますね。だから「説く」ということです。教えを説く、教えを述べる、教えを伝えるという意味を「帰」と言う字は持っている。

「命」の方に行きますね。「**命**」の言は、業なり、招引（まねきひく）なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計（はからう）なり、召（めす）なり。」

「命」の方は「弥陀の招喚（しょうかん）」を表します。「帰」の方は「釈迦の発遣（はっけん）」を言います。だから私たちに帰命が起こると善導大師は言った。その帰命を帰の方は釈迦の発遣、命の方は弥陀の招喚。この発遣と招喚によって、私たちは帰命と言うことが起こる。これを言おうとしています。ところがさらに進めて、「**ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり**」。これがわかりにくい。善導大師が帰命と仰ってくださった、その「帰」には釈迦の発遣と、「命」には弥陀の招喚と言う、この二つの意味がありますと親鸞聖人が押えて、さらに、「**帰命**」は本願招喚の勅命なり」と、これが親鸞聖人が書き直す帰命の意味なのです。

普通、衆生が帰命と言うことを起こすのですから、帰命は本願招喚の勅命を聞くからであるとか、あるいは、私たちに帰命が起こるのは、本願招喚の勅命が届いたからであるとか言いそうですよね。ところが、これ、帰命が、衆生の帰命は如来の本願招喚の勅命であるというふうに、相対的な言い方を超えてしまって、帰命するということがそのまま本願招喚の勅命なのだ。本願招喚の勅命って何かと言ったら、いや、帰命と言う形でしか実現しないのだ。だから帰命は本願招喚の勅命である。こういうふうに実に、解説ではなくて、何というか、衆生と如来という相対性を超えてしまっている。わかりますね。

『観経』はいつも言うように、お釈迦様が霊鷲山から王舎城に降りて来ますから、そして、降りて来て私たちにわかるように説いてるから、『観経』は必ず「相対的」に説かれています。善か悪か、衆生か如来か、娑婆か浄土か。そうすると、これは衆生が南無阿弥陀仏を唱えて、衆生が帰命する。衆生が発願回向を起こすと。こういうふうに衆生と念仏とが別れてしまう。

（註：衆生が南無阿弥陀仏、浄土を三人称的、対象的に考えるのではなく、「汝」「あなた」「友よ」との二人称的呼びかけ、南無阿弥陀仏は「汝、小さな殻を出て、大きな世界を生きよ」の呼び覚ましの呼びかけです。）

そうなる、どうなったかと言いますと、それはやっぱり衆生が念仏を唱えるのだったら、一回唱えるよりも百回唱えた方がいいんじゃないの。いやいや百回では足りないだろう、法然上人は日課七万遍と言っているのだから、それは七万遍唱えなくてはいけないのではないかというふうに、どうしても私たちと念仏とが離れてしまうと、そういう問題が起こってくる。

だから法然門下は「一念義」か「多念義」と言う事でもめてくる。それはどうしても私が念仏を「唱える」という相対分別の中で考えてしまうから、そうなる、一遍より十遍、十遍より百遍となってしまう。そういう相対性を超えていく（「称える」）、さっき言った相対分別を超えた世界が一如の世界だから、『大経』の世界だから、親鸞聖人はそこに立って、相対分別を超えてしまって、「**帰命**」は本願招喚の勅命なり」と。本願招喚の勅命が私たちに貫いたから「帰命」と起こっている。だから、帰命と言うことは本願招喚の勅命であるというふうに、衆生が帰命する、というような、そういう相対性を超えてしまって、「**帰命**は本願招喚の勅命である」。こういう言い方をするわけです。

そして先ほど言ったようになぜ帰命が起こるかということ、本願の方にその理由があるからです。わかりますね。因が何か、何が因なのか、帰命する原因は何なのと言ったら、それは『大

経』の本願招喚のはたらきです。ここにちゃんと因が押えられている。こういうふうに『大経』によって相対分別を超えて、名号解釈をもう一度やり直すわけです。そこに今度は、善導大師が十分に果たせなかった仕事を親鸞聖人が果たそうとするわけです。それはさっき言ったように現実的にも、一遍よりも十遍やろうとか、十遍よりも百遍やろうというふうに問題が起こっている。起こって来るわけです。どうしても「衆生と念仏」ということになるよね。

だからそういう問題じゃないんだと。「本願の念仏」。本願が名号になっているのだから、だから本願の方に理由があり、本願の方に因がある。「帰命する」と言っても私たちが努力で帰命するんじゃない。本願の方に因があって、本願の方に従ったからだ。こういうふうに因の方をはっきり道理として明確にしていくのが「親鸞聖人の名号解釈」の仕事だと思ってください。これはまた大変な仕事なのですが、まあ天才です。帰命のところはいいですね。

その次に行きますよ。帰命は今言ったように一応は釈迦の発遣と弥陀の招喚による。しかし帰命の根源的な意味は、「本願招喚の勅命なり」。これです。いいですね。そして発願回向と、こういう場合に善導大師だったら衆生が発願して、そして人生のすべてを振り向けて浄土に生まれていこうとする。というふうに発願回向は衆生の発願回向でした。ところが親鸞は「**発願回向**」**と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり**」と。なぜなら、浄土を忘れて生きるのが凡夫だから、毎日毎日あくせくあくせく、凡夫は浄土を忘れて生きているのです。その忘れている私たちに、どうして発願回向なんて起こるの、凡夫に起こるはずないじゃないのと言うのが聖道門の批判ですからね。

それに対して、いやいや私たちの力じゃないよと。如来の方が先に発願して、そして一切の衆生を救い取りたいという本願を建てて、そしてそれを南無阿弥陀仏と言う名号に全部封じ込めて、それを私たちにくださっているから、だから私たちはそれに従って浄土に生まれて行きたい、浄土に生まれて行きたいというよりも一如の世界に帰って行きたい。だから本願の方にその理由があるのですよ。因は本願ですよと言うふうに、発願回向、これは如来の方がすでに発願して、如来の発願と名号の回施、名号の回向、ここに私たちのような者がかろうじて浄土を願うという理由があるのですよと。こういうことになります。わかりますね、申し上げていることは。

親鸞と言う人は思想家でしょう。これだけでは理由がわからないから、これだけでは疑問が出るよ。これは前に申し上げましたね。『選択集』は念仏一つでいいと言ったと。しかし、念仏で助かる念仏で助かると言っても、何で助かるのかという理由がわかってないから、今でも法事の時にみんなよく言うでしょう、「ご院家さん、あなた坊さんやから念仏が大事やというようなことを言っとるけど、それより、おいしいもの食うて、酒飲んでコロッと死んだらいいがな」言うて。「そんな念仏より金もうけの方がよっぽど大事や」と言うようなことをみな言う訳や。「まあそやな」言うて（笑）。「ころっと死にゃいいけど、なかなか死なんぞ」と言って、何とかしてこっちに引き込まなあかんわ（笑）。それで何とかして「念仏が大事や」と言わせなあかんから。

「コロッと死んだらいいけど、あんた絶対コロッと死なんぞ、一年も二年も寝たきりになつたらどないするんや、酒飲めんようになるぞ」と言って、何とかして引き込んで（笑）、そして、なぜ念仏が大事かということと言う時には、これは「南無阿弥陀仏を称えなさい称えなさい」だけではわからないから、「お前は自力でそうやって調子に乗って生きとるけど、今にお前、足立たんようになるぞ、腰は立たんようになるし、頭はボケて来るし、人の世話ばかり受けて生きていかならんようになるたらどうするんじゃ」というようなことを言っ、「自力で最後まで生き

て行けると思うなよ」と言って、何とかして引き込まなあかんわ（笑）。

ちょっとでも乗ってきたら「よっしゃ！」というもので（笑）、それで人の世話になって、そもそも生まれたときから人の世話で大きくなっているんやぞ。それを自分一人で偉そうに生きて来たようなことを言って、一人で死んでいけると思っているのか、お前絶対寝たきりになっておしめ取ってもらわなあかんぞ（笑）、最初から生まれてから死ぬまで人の世話になって生きとるやないか、と言って、何とかしてこっちに引き込んでいかなあかん（笑）。ねっ。

そして最後には、死ぬときにどうするんじゃ、そんなこと言うて。「お前は自分で死ぬと言うとるけど、死ねへんぞ」と言って、何とかして、「死ぬということを超えて生きなさい」。それを言っているのが南無阿弥陀仏の本願の教えよと。

自力を尽くして自力では救われないと。自力ではどうにもならないと。最後には「わあ〜」と泣かなければならない。その泣かなくてはならないことを通して、初めて仏様の世界が開かれてくると言っているのですから、何とか、そこまで引っ張って行って、それを教えなくてはならない。それは、全部理由は本願の方にある。理由はね。念仏は、これは本願が念仏になっているのだから、本願の現実体、現実体で、これでいいのだ。いいのだけど、その理由はということになると全部本願の方にあるから。ところが何度も言うように『観無量寿経』は本願を説いていないから、だから本願と言うことが表向きに言えないために、「念仏しましょう、称名念仏ですよ」。

「称名念仏で救われるのですよ」と。またこの頃の人には偉かったのよ。僕らみたいなバカじゃないから「そうそう、お念仏が大事や」と皆知っとったんだ。今は、金の方が大事やと思っているから、だから寺に来るのはみんな金にならない人ばかりしか来ない（笑）。金のある人は金もうけばかりしている、金の方が多分念仏より偉いと思っているからです。

だからそういうふうに、理由は全部本願の教えの方にあるわけです。自力を尽くして生きなさいと。ところが自力がどうしても届かないことがある。それは『観経』で言えば死ぬときです。今まで「好きなことをしてうまいものを食べて酒を飲んで死んだらいいやないか」と言っていた人に限って、死ぬときになると暗い顔をして、どうしたらいいかわからなくてオロオロする。その時自力は通らないようになる。その時に、『観経』では「南無阿弥陀仏を称えなさい」と。「念仏を称えなさい」と。昔、念仏の世界に生まれて来ていたんだから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言っていると仏様との関係が回復されて、こっちは段々頭がボケてきて、もう死ぬころになると意識なんか無くなっていく。そうすると仏様の世界の方が本当だというふうに迫ってくる。だから仏様が迎えに来るといふふうに象徴的に教えてるけど、あれはこっちの頭がどんどんどんボケてくるからよ。死ぬとき。だから少しボケた方がいいって（笑）。

いつかも言っていたでしょう、仙台の住職がガンで亡くなっていくときに、報恩講の時に真っ白の蠟燭みたいな顔になって、もう真っ白な顔で、ほとんど危篤状態です。そしてご門徒さんの方に向かって、こうして、もう何と言っているかわからないけど、奥さんが「は一」と言って耳を寄せていて、「生きることと死ぬことは一如です」と言ったのです。生きることと死ぬことを私たちは分けて考えて、生きることは良くて死ぬことは嫌だと思っているかもしれないけど、「生きることと死ぬことは一如です」。同じことなのだと。そして「南無阿弥陀仏」と言ったのよ。「みなさんありがとう」と。すごいやろう。もうボケてきているのです。身の分別なんて何の役にも立たないと。そして死んでいくのだということが事実なのだと。それを引き受けてしまえば、いいも悪いもないと。どっちも一如ですと言って、南無阿弥陀仏を称えることによって、

やっぱりそういう功德が与えられるから念仏しなさいと『観経』では説いているわけです。

ところが今言ったように、何でと言う理由は全部本願の方にある。完備されているから、本願の方を因として顕かにしていく。それが『大経』に立った親鸞の仕事です。『観経』は本願が説かれていないから、その理由は言えなかった。だから法然上人も言っていない。わかりますね、だから明恵のような批判が出た。だから親鸞は先取りして、そんな批判は出るに決まっていると。道理としては完結していないからね。なぜ凡夫が救われるかと言う理由、なぜ凡夫が仏道を歩めるかと言う理由、それを本願の方に依って顕かにしなければならないというふうに、『観経』に立って念仏の六字釈をした善導大師に対して、『大経』に立って本願の因を顕かにしていった。これが「親鸞の名号解釈」の仕事だというふうに思ってください。言っていることわかりますね。はあ、これだけ言ったらもういいかな（笑）。言っていることわかりますね。それでももう少し先に行きますよ。

「**即是其（ご）行**」、阿弥陀仏はすなわちその行であると善導大師が言いましたね。その「**即是其行**」、すなわちその行である阿弥陀仏の方から私たちの帰命と発願回向の願を全部満たしてくれるから、阿弥陀仏がすなわちその行であると善導大師は言ったのですね。

「**即是其行**」と言うは、**すなわち選択本願これなり**。」 何によって満たされるかと言うと、選択本願、「南無阿弥陀仏一つを称えなさい」と。法蔵菩薩の方が苦勞して南無阿弥陀仏一つになっていった。そして「南無阿弥陀仏一つで必ずどんな人も救われる」と誓っているのが第十八願。その選択本願に依って私たちは、衆生は全部満たされていくのです。「**即是其行**」と言うは、**すなわち選択本願これなり**」。いいですね。まちがいないでしょう。

そして、「必ず往生を得る」と善導大師は言った。その必ず往生を得る、「**必得往生**」と言うは、**不退の位に至ることを獲ることを彰（あらわ）すなり**。」 必ず浄土に往生を得ると善導大師が言ったのだけでも、それは不退の位、不退の位と言うのは、菩薩の不退転の位。それはもうちょっとと言うと、空を覚った位。涅槃を覚った位。だから必ず往生を得ると言うふうに善導大師が仰ってくださったけども、それは大涅槃に包まれて、そして、「必ず大涅槃の世界に至ると言うことを獲る」。この「獲る」というのも「獲得名号」の「獲」。因の時を「獲」という。いつか言いましたね。「得」は「果」です。こういう使い分けがあります、親鸞聖人は必ず。

そうするとこれは「不退の位に至る」という因の位を今はっきり獲たのである。ここは「往生」ではなくて、「涅槃の覚り」と言い変えてるところに『大経』の特徴があります。善導大師は浄土教だから、浄土に生まれるとこう言った。法然上人も浄土教だから浄土に生まれるとこう言った。しかし、さっき読んだように、善導大師も命終われば涅槃の覚りを獲るとこう言っている。あるいは法然上人だったら「**生死の家には疑をもって所止（しょじ）となし、涅槃の城（みやこ）には信をもって能入となす**」（『選択集』：『真宗聖教全書一』967、『西・浄土真宗聖典七祖篇』1248）、「涅槃の城に入る」。これは『大経』の信心の表現なのです。だから善導大師は『観経』に立って「往生」と言ってくださったけれども、これは「必ず涅槃の覚りを獲る」という「因」を獲たのである。「獲」。

『経』（大経）には「**即得**」と言えり、即得往生の「即」と言っている。『釈』（易行品）には「**必定**」と云えり。必定の菩薩、龍樹です。「必」。必得往生の「得」、善導大師は必ず「往生を得る」と言う時に「必得往生」と言いましたね。この「得」は『大経』の第十八願の「得」です。「必」は龍樹が「必定の菩薩」と言った時の「必」である。

「即得」の「即」の言は、願力を聞くに由って、報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり。」(東聖典178頁、西170、島12-25~)

即得の「即」と言うのは何かと言うと、これは時間を表しているわけですから、本願の教えを聞いて、本願のはたらきをいただいて、必ず仏になるという報土の真因が決定する究極的な時間を「即」と言っている。うまく訳せませんが、一応わかりますね。即得往生の即というのは、これは「必ず仏になる」、「真実報土が確実に私のものになった」と言う「時剋を表す即」である。

「必」の言は、審(つまびらか)なり、つまびらかと言うのは、もうはつきりわかっている。仏になるということがはつきりわかっている。そして本願力によって「然(しからしむる)なり」、ただし分際がありますよ、「分極なり」、凡夫と言う分際と如来の本願と言う分際と明確にありますよ。ここが聖道門と違うところです。「分極なり」、そして最後に「金剛心成就の貌(かおばせ)なり。」

必得往生と言うのは、「金剛心成就の貌(かおばせ)なり」。金剛心成就と言うのは、他力回向の信心を「金剛心」と言います。だから他力回向の信心が完成したその貌(かおばせ)、相(すがた)、それが必得往生ということですよと言うふうに、必得往生を金剛心の成就であると。すごいですね、全部、本願によってその理由を述べて、最後には、すべては他力回向の信心のところに感得されている事柄ですと。金剛心、金剛心と言うのは女性が好きなダイヤモンドよ(笑)。一つや二つ持ってるんじゃない。ダイヤモンドのように絶対に壊れない他力回向の信心が成就した相(すがた)、それが即得往生、必得往生ということですよ。こういうふうに本願によって、なぜ帰命と発願回向が起こるかという理由をあきらかにして、そしてそれは金剛心成就、信心のところではっきりといただくことができるのですよというふうに結ばれているのです。

東聖典521ページの二行目、『尊号真像銘文』(そんごうしんぞうめいもん)、ここに今私が申し上げたような要点を親鸞聖人がちゃんと書いてくださっている。「言南無者」というのは、すなわち帰命ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり」(西655~、島17-6)。

そうやね、さっき言ったように、帰は釈迦の発遣、命は弥陀の招喚。その「釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり」。「このゆえに「即是帰命」とのたまえり」。すなわちこれを帰命と言ったんだと。「亦是発願回向之義」というのは、二尊のめしにしたがうて安楽浄土に生まれんとねがうころなりとのたまえるなり。「言阿弥陀仏者」ともうすは、「即是其行」となり。……」というふうに、ここに親鸞聖人が丁寧に解説して下さっているから、これと見比べながら、さっきの「親鸞の名号解釈」を見比べながらよく読んでみることで、そうするとさっき言っていたことが少しずつわかってくるようになると思います。

それでは今日はちょっと難しかったですか？ 僕が難しいんじゃないよ。親鸞聖人が難しいんやからね(笑)。親鸞聖人が言うた通り言うとするんやから。けど、その理由はおわかりいただけでしょう。『観経』による名号の解釈と、『大経』の本願に立った名号の解釈は違うのだと。なぜ凡夫が凡夫のままで仏道が歩めるのか、その理由を本願の方に依って顕かにしていった。そこに親鸞聖人のお仕事があるのだということになります。それで、どうぞ質問をして下さい。

## 質疑応答

**質問者 1** ・ ・ 先生、どうもありがとうございました。以前先生が、法然上人が「出世本懐の経は『阿弥陀経』だ」と仰ったことについて考えてみたのですが、『阿弥陀経』というのはお浄土のことは書いてあるのですが、私たちとの接点というのがあまりわからない感じなのです。

それを相対的とか絶対的な世界というのを分別知の私たちの方にわかるようにしてくださったのが『観経』で、だから法然上人は私たちにどういうふうに救われるのかについては具体的に、念仏しなさいと仰いましたし、『往生礼讃』では、今日読んだ聖典174ページのところ、「ただ念仏の衆生を觀そなわして、攝取して捨てざるがゆえに、阿弥陀と名づく」（後から三行目）という形で、「攝取」という言葉を衆生の側に用いられて説明されたという形と思っているのですが。それをどうして親鸞聖人が「本願」と言うもので、なぜそうなっているのかと言うのを浄土の誓願の、今日の「**深重の誓願を發**（おこ）して」（八行目）というところで、歴史と論拠と言うポイントで、歴史と言うか、浄土の歴史というか、なぜそのように本願が起こったのかという論拠と歴史と言うところで『大経』というものを持ってきて説明せざるを得ないというか、そういう形で本願を建てて、こういうふうになっているんだよという形で、本願ということと言う上で『大経』を持ってきて、それが『大経』が出世本懐の経であるという形で親鸞聖人は『大経』を立てられたのかなと思ったのですが。

**先生** ・ ・ うん、よくわからないな。

**質問者 1** ・ ・ 今日の174ページの真ん中の文を拝借すると、「光明名号をもって十方を摂化したまう」までが『阿弥陀経』と『観経』の関係なのかなと思うのですがけれども、そこに「**深重の誓願を發して**」というのと、「**ただ信心をして求念せしむれば**」と言うところで、内因と言うところを持ってくるために、『大経』というものがどうしても必要であったということなのかなというふうに思っています。

**先生** ・ ・ そうそう、そうです。

**質問者 1** ・ ・ それで『阿弥陀経』と『大経』と重なっている部分があるということを延塚先生が以前仰っていたので、そのことをもって、『大無量寿経』をこれこそが本当に浄土真宗というか、南無阿弥陀仏というものの出世本懐の経であるというふうに親鸞聖人が立てられたのかなと思いました。

**先生** ・ ・ あのね、なかなかここは難しいところだけれど、目が外に向いているから、私たちには内因と言う意味がよくわからないのだ。それはね、内因のというのは、あんた自身の中にはたらいっている本願のことを言っているのです。皆さん一人一人の中に本願がはたらいっている。それは例えばさっき言った日常生活に追われて、何かこう、満ち足りないとか不安であるとか、何かイライラするとか、みんなと一緒にいても何か寂しい気がするとか、というような人間としての日常生活の中のイライラ感とか、そういう形で中から何か促しているのです。本願の声を聞くと、

我が国に帰れと、いつまでそっちであんた我を張ってがんばっているのですか、だからしんどいのです。仏様の世界に帰れ、命の世界に帰れと、一如の世界に帰れというふうに、「内因」と言うのは、人間の中から促しているはたらきを親鸞は言おうとしているということをまず知っておいてください。

ところが解説をするとどうしても四十八願を外に見てしまうから、だからこの辺はなかなか難しいのだけでも、「内因」と「外縁」と言うのはそういう関係です。だから外縁というのはどうしても仏様を外に見ているからね、例えば善導大師の二種深信だったら、法の深信だったら「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、(願力に乗って) **定んで往生を得** (往生が決定する)」と信ず」(「信の巻」・東聖典215頁～、西218、島12-59～)。これが善導大師の表現でしょう。それもだから、「外縁」になるのです。仏様の本願が外から私たちを救って、私たちはその本願の上に乗って、本願のはたらきによって往生する。実にわかりやすい。しかしそれはどうしても外になる。『観経』はどうしてもそういうふうに外になってしまう。

ところが『大経』は「内因」。内から促してる声があるでしょうと。毎日イライラしたり、けんかしたり、時には「助けてくれ！」と叫んだりする。それ全部あなた自身の命の叫びよ。というふうに内から私たちを促してる声があるでしょうと。それが『大経』では本願の教えとして説かれているのよと。こんなふうにまずは理解してほしいと思います。内因と外縁と言う時にはね。

**質問者 1** ・ ・ 外縁までを法然上人が言われて、それに内因というものを加えることによって法然上人のお仕事を完成されたという形になるのでしょうか。

**先生** ・ ・ いや、それが法然は偉いのです。そこが。法然は全部わかっています。だから信心をさっき言ったように「生死の家には」、あれは二種深信を言い換える。二種深信の機の深信の方と法の深信の方を言い換えて、機の深信の方を「生死の家には疑いをもって所止(しよじ)となし、涅槃の城には信をもって能入となす」(『選択集』)というふうに言い換えました。そこ言い換えたのわかりますね。そうすると、言い換えたという、なるほど「生死の家には疑いをもって所止とする」というのは、これは機の深信やなど。そして「涅槃の城には信をもって能入となす」というのが、これは法の深信やなど理解する。ちがいます。そうじゃなくて、『大経』で機の自覚を言う時には二十願の機だと言いました。

だから仏智疑惑のこのままだが、実は、涅槃の覚りに包まれているのだと言うことを法然が言っているのです。そしてそれは「能入の信心」によって獲得するんだと。法然偉いんです。それをそのまま歌にしましょうか。「**感染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ**」(『正信偈』、東聖典206頁)。あれが法然が言った通りを歌にしています。それは機の深信、法の深信と言うのを一回忘れて、仏智疑惑のままで第十八願の中にある。だから「生死の家には疑いをもって所止となす」という、この仏智疑惑しか自分にはないと、死ぬまで。この仏智疑惑の者が仏智疑惑だと知らされたということは、仏様の十八願の智慧が照らしているからだ。だから十八願の中にあるということを法然がちゃんと言ってるわけです。

あれが「師資相承」(ししそうじょう)のときに法然と問題になったところだと思います。そしてそれを親鸞はそのまま引き継いだ。だから「感染の凡夫が信心を発せば、生死即涅槃を証

知する」。生死のまんまで第十八願の大きな世界の中にあるのだということ。それを前にも言ったように歌にしているのが源信の「煩惱、眼を障(さ)えて見たてまつらずといえども、大悲憊(ものう)きことなく、常に我を照したまう」(『正信偈』、東聖典207頁)。自分の煩惱の身は死ぬまで消えないのだと。だからいつも自分を立て、「自分を立てる」ということは基本的に「仏智疑惑」ということです。仏を疑っている。仏よりも自分の方が偉いと言うんだから。自分を立てるということは仏を疑っているということや、基本的に。その仏智疑惑のままで、実は二十願の機を自分で反省できないのだから、二十願の機がわかったということは第十八願の深い智慧によって照らされたのだと。だから十八願と二十願とは重なっているのだということ、法然がああ信心の表明のところで言ってるわけです。あれは法然偉いね。もうちょっと感動していいところだよ(笑)。つまり法然偉いんです。法然偉い。

親鸞は法然のところにいる時に全部学んでいます。だから法然は何でも答えたのです。全部答えたと思う。「そうそうあなたが言ってる通りよ」と。信心が涅槃を開くのと。「だから私はあんなふうに言い換えました」と。「そう、君が言っている通り」と親鸞を認めたのですよ。法然は偉いです。

まあそれをもとにして、『大経』と『阿弥陀経』が重なっている。十八願を表す『大経』と、それから二十願の機を明確にする『阿弥陀経』とが重なっている。そう考えても間違いではありません。前に申しましたように『大経』は、『大経』の下巻の最初の方に『観経』の上品上生から下品下生までの大事どころが説かれている。一番最後の「智慧段」のところに、今言う、二十願の機がどうして救われるか、これが説かれている。上品上生のところは『観経』、一番最後が『阿弥陀経』。そうすると、よく考えてください。阿難とお釈迦様の出遇いから始まるね、『大経』は。しかし最後に、煩惱のままで救われなければお釈迦様と阿難との出遇いが完結しない。

だから一番最後の問題を取り上げている『阿弥陀経』が実際的には出世本懐経だと法然が言ったのです。完結しないでしょうと。凡夫が凡夫のままで救われるということがあって初めて阿難とお釈迦様が出遇ったということが完結するんですと。だから実際的に言えば『阿弥陀経』が出世本懐経なんだと。こう言ってるわけです。それも多分親鸞と法然が議論したと思います。私は夢で見ましたので間違いはないと思います(笑)。

**質問者 1**・・・ありがとうございました。

**先生**・・・ほかに何かありますか。どうぞどうぞ。

**質問者 2**・・・先生今日はどうもありがとうございました。先般、私が質問して名号の六字釈と親鸞の名号解釈について今日お聞きして、すごくありがたかったです。ありがとうございました。

**先生**・・・違いがわかったでしょう。

**質問者 2**・・・はい。それでですね、今まで私は「帰命は本願の勅命なり」というのは、「勅命」と言うところを主に思っていたのですが、今日「本願の」と言うことを強調されて、「あそうなんだ」、と言うことをあらためて思わされました。本当にありがとうございました。

**先生**・・おわかりいただけて大変ありがたいです。ですから六字釈と言う場合には、これは善導大師の六字釈に限ってください。親鸞の場合は「六字釈」とは言わない。「名号解釈」というふうに言ってください。

**質問者 3**・・先生、因と果のことなのですが。私はいつも因と果を何で分けるのかなと思うのですが、それはやっぱり機と法と一緒にになっているのかなと思ったんです。機法一体のことを言っているのかなと思ったのですが。

**先生**・・わかりやすく言います。聖道門は果の覚りだけでいいのです。果の覚りを修行によって悟ればいいのですから、因はいらない。果の覚りだけでいいのです。仏教は基本的にそうです。ところが、それはよくできる人しかわからない。だから十方の衆生を救おうというのが、これが阿弥陀の仕事ですから、その十方の衆生を救おうとするときに、どうして救おうとしたかというのが「五劫の思惟」ですね。そして因の本願ですね。そして十八願一つじゃなくて四十八も本願を建てたのです。

あれが十方の衆生、つまり自力で生きる衆生を何とかして救いたいと、その道程までちゃんと見据えながら因の本願を建てた。これがなかったら、果の覚りだけなら修行をしてください。因の本願があるから、凡夫でも救われる。因の本願は私たちが煩惱具足の凡夫に帰って、人間の方に救いはないと言って泣けばいいのです。

この前言った小松のばあさんみたいに「わあ～助けてください！」と泣いとけばいいんだ。そのうちに、「助けてくれ助けてくれ」って外に見ていた仏様なんてどこにもおらんということがわかる、3年泣いとったら。そのうちに目が内向きに向いてくる。そして「助けてくれ」と言うこの心は生まれてからずっとある心だと。これは一体何なのか。それこそ「本願招喚の勅命」だということがわかる時が来る。それは凡夫が凡夫のまま救われるために、どうしても因の本願がなければならない。もしできる人なら果の覚りだけでいい。それは因の本願があるから、どんな人も凡夫のままで救われる、ということを実現するために因の本願がどうしてもいる。だから「因の本願」と「果の覚り」と、この二つが凡夫を凡夫のままで、しかも十方の衆生を救うために因の本願が必要なのです。

**質問者 3**・・わかりました。

**田畑先生**・・では時間ですので、これで終わりとします。次回は6月の9日を予定しておりますが、最後に「恩徳讃」を唱和して終わりたいと思います。(終了)